

雲のごとく

A CLOUD OF WITNESSES

滝川晃一編

伝道出版社

雲のごとく

A CLOUD OF WITNESSES

滝川晃一編

『このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いつさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。』

(へブル人への手紙十二章一節)

伝道出版社



明治37年ごろの伊香保集会の信者

笠松可免子姉

(後列中央の女性)

笠松立三兄

(前列二人目)

築山好太郎兄

(前列右端)



昭和6年頃の神田集会の兄弟たち

林兄

松沼兄

永井兄

中柴兄

藤本兄

築山兄

中村兄

桜井兄

西原兄

野城キミ姉

(新潟・野城喜代治兄
の奥さん)

はしがき

新約聖書『使徒の働き』は、本当は『聖霊の働き』だとよく言われます。『聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、……エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。』（使徒の働き一章八節）正にその通りに主の福音は、聖霊の御力に運ばれて私たちのところまで伝えられました。

この書の目的は、単にクリスチャンの小さな群れの歴史を綴ることではなく、『取るに足らない者・無に等しい者』を選ばれた神様が、私たちに福音を伝えてくれた先輩たちやその群れを、いかに導き育てられたかを知ることであり、それは信仰の駆せ場を走る私たちに、さらに感謝と賛美を満し、大きな励ましを与えることと思えます。

明治時代の後半に、いわゆるキリスト教の既存宗派を否定し、ただ御言葉と聖霊の導きに従って、聖書どおりの集会（教会）を建てようとする信仰が、日本に伝えられてからもう八十年の歳月が流れました。その間に何度か戦争があり、社会の変遷も多くありました。そのすべての時において神様は常に真実であられ、信じる者の信頼に応え、愛と恵みを

示し、『おりにかなった助け』を惜しまれませんでした。

この豊かな神様のあしらいを、後に続く神の民へ書き残すために出版するこの書は、ただ地上にあつて神様に仕えておられる『多くの証人たち』である先輩諸兄弟の「証し」を中心に編集してあります。その理由は、一人の筆によって書かれた場合に起りがちな真実からの遊離、偏重した記録になることをさけるためです。

執筆を御依頼申し上げました折に「人間とその力を崇めず、他をけなさず、ただ神様の御栄光を求める。」ことをお願いしました。重複するところ、くい違つところもありますが、原文をなるべくそのまま掲載することにしました。赤裸々な証言は、如何なる名文にも勝つて力あるものです。

戦時中の迫害時代を経験したある先輩が、我家を訪れて下さった時のことですが、「独身のときならいざ知らず、小さな子供を抱えている今のような生活の中で、キリストを捨てるか子供を殺されるかと迫られたら、信仰を保つ自信がありませんよ。」と冗談まじりに話しますと、その先輩は真面目な顔をして言いました。

「私たちを見なさい、立派な信者がいますか。こんな者たちでも神様に忠実に従おうとさ

えするなら、主は力を与え強くして下さるのです。心配する必要はありません。」

このような真直ぐな信仰に生きる先輩に出会えたことを感謝します。

また彼らが生命を賭け、あらゆる不利益や苦しみに甘んじながら、固く守り通したものの尊さを深く考えて見ますとき、私たちも同じ信仰の道を最後まで忠実に走りたいものだと願うものです。

多くの先輩諸氏に迷惑をおかけし、その御苦勞の上にこの書は出版されました。また、数々の写真や資料の蒐集に御協力くださった諸兄姉には、心から御礼を申し上げなければなりません。

この書を手にもされるクリスチャン各位が、『苦難の日に私に答え、私の歩いた道に、いつも私とともにおられた神』（創世記三十五章三節）に祭壇を築く生涯に生きられますように祈ります。

一九八七年二月一日

編集者

滝川晃一

目次

はしがき

滝川晃一 五

戦前篇

証し（戦前篇その一） 地の果てにまで

藤本 善右衛門 一三

わが父と母の記録

笠松 雅夫 三五

鯉池のころ

水野 ヤス（談） 四一

証し（戦前篇その二） 神の御手に導かれて

水野 千代吉 四二

証し（戦前篇その三） 私の叔父・築山好太郎兄

中柴 光男 六八

証し（戦前篇その四） 主は今に至るまで

佐藤 精雄 七七

証し（戦前篇その五） ヘイ兄と台湾の思い出

黒田 巖 九〇

船板塀の町の福音 —— 中村兼愛兄を長浜市に訪ねて ——

編集者記 一〇六

証し（戦前篇その六） 主にかえりみられて

保坂 仁九郎 一一三

戦時中の迫害篇

特高警察・検事・裁判記録

編集者記 一五四

一、迫害の意味するもの 一五四

二、迫ってくる権力との対決 一五八

三、迫害の公開資料について 一六二

四、第一次の逮捕者 一七二

五、第二次逮捕から予審請求まで 一八二

六、予審請求「目的ノ遂行ノ為ニスル行為」 一九八

七、予審終結決定書の全文 二〇一

八、そのあとの記録 二一六

九、もうひとりの宣教師 二一九

戦後篇

地の果てにまで

証し（戦後篇その一）

恵まれた日々の想い出

編集者 記 二二九
佐野良夫 二三三

証し（戦後篇その二）

群馬県に於ける主の働き
導きの御手に支えられて

北野修 二四八

証し（戦後篇その三）

導きの御手に支えられて

堀啓祐 二六二

証し（戦後篇その四）

神の栄光をほめたたえる者となる

小川坦二 二七八

証し（戦後篇その五）

カーテン姉とトロッタ姉の思い出

中原道夫 二八一

証し（戦後篇その六）

走るべき行程を走り終え

城野集會 二八九

証し（戦後篇その七）

砺波市に建てられた神の集會
敷浪の集會

松長宏 二九六

敷浪の集會

敷浪集會 三〇〇

金沢の集會

金沢集會 三〇一

証し（戦後篇その八）

みちのくに福音の光が

笹沼武 三〇三

証し（戦後篇その九）

外国人姉妹の働き

レイモンド・ローア 三一五

伝道出版社の働き

グロリア・スピッチリ 三二八